

研究・調査プロジェクト報告

## 自然科学と仏教

石 伏 叡 齋

自然科学とその知識の普及は、仏教なかんづく法華仏教の教化にどのように影響しているのだろうか。まず、キリスト教圏での自然科学の生い立ちについて述べ、自然科学の進展とともにキリスト教はどうなったのか。一方で、自然科学と仏教の関係性はどのようなのか。更に、自然科学の知識が普及した時代の教化について考える。

### ● 宗教は科学に置換

宮澤賢治の『農民芸術の興隆』（大正十五年（一九二六））に以下の如くある。

宗教は疲れて科学によって置換され 然も科学は冷く暗い

宗教中の天地創造論 須弥山説 ○道は拝天の余俗である歴史的誤謬

見えざる影に嚇おどされた宗教家 真宗

科学は如何 短かき過去の記録によって悠久の未来を外部から証明し得ぬ

科学の証拠もわれらがただしか而く感ずるばかりである

そして明日に関して何等の希望を与へぬ　いま宗教は気休めと宣伝　地獄

※ちくま文庫　宮沢賢治全集　十二八頁

このことが書かれた大正末期にはすでに、宗教の権威が凋落し、科学がそれに取って代わるうとしていた。しかし、その科学は万能ではないし唯物論的な冷たさを内包している。宗教に内包される宇宙観・世界観は自然科学によって説得力をもって否定され、宗教の形而上学は危機に瀕し、仏教でもその色彩が最も濃い浄土真宗にとっては大変な危機感があつたのだろう。浄土真宗では明治時代に清沢満之や暁烏敏あけがらすはななどが教義の近代化や改革を図り活躍した。宮澤賢治の父宮澤政次郎は暁烏敏あけがらすはなを花巻に招待して講話を受けている。

明治五年の学制頒布より近代科学が教育されるようになり、ダーウィンの『種の起原』（一八五九）が明治二十九年（一八九六）には翻訳されている。そんな自然科学的な予備知識のある近代の日本人に『旧約聖書』の『創世記』に始まるキリスト教を唯一絶対の真実と信じることは難しく、国家神道の時代が終わった戦後に到ってもキリスト教が日本に根付かなかつた理由の一つであろう。優れた文化的遺産であるとしても『古事記』や『日本書紀』の天地創成と神々を歴史的事実として認識する日本人は希有であろう。一天四海の須弥山の世界も地球上に見つけることは不可能だ。宮澤賢治の時代は、既に自然科学が宗教に取って代わるほどにまで日本にも浸透していた。

## ●自然科学の生い立ち

近代的な自然科学は西欧のキリスト教圏で誕生した。当初の自然科学は宗教や哲学と未分離で、創造主たる神が創つたこの世界を整合的に思考研究し、その中に神を見出そうとしていた。その、中世の西欧キリスト教による自然観

は以下の如くである。

自然も人間も神によって創造されたもので、それぞれ上位の者のために存在し、人間は神のために、自然は人間のために存在する。人間は自然を越えて、その上に臨み、これを支配するもの。自然を人間と全く独立無縁なものとして徹底的に非人間化することによって客観化する。<sup>\*</sup>その客観化によって自然を客観的に観ることができ、近代的な自然科学の下地となった。

※「神の贈与により (ex donazione divina) 人間のものとなっている自然の支配権」

フランシス・ベーコン 『ノヴム・オルガヌム』I—一二九

『近代科学の源流』伊東俊太郎 三四九頁

また、そのような思想が肯定され浸透する背景として、近代の自然科学が発展した西欧枢軸国は自然災害が少なく、自然に対する畏怖や神格化が起こりにくく、客観化されやすかったことが挙げられる。

かくして、フランシス・ベーコン (一五六一—一六二六) とデカルト (一五九六—一六五〇) が、近代の自然科学発展への道筋をつけた。デカルトは、彼の時代の時計が部分品で組み上がっている機械であるように、自然界の物事をとらえた。そこから起こった「①自然の機械論的非人間化」といった機械論パラダイム。また、前述の「②自然の操作的支配」、神の贈与により人類のものとなっている自然の支配権という考え方が起こる。この近代科学の二大性格が、ピザンチンやイスラム圏よりも科学的には後進であった西欧を、一挙に十七世紀の科学革命へと導いた。すなわち、ガリレオ (一五六四—一六四二)、ニュートン (一六四二—一七二七) などが活躍する時代を迎える。

## ●神は死んだ

また、キリスト教によって誠実感（*wahrhaftigkeit*）<sup>\*</sup>という高度に発達した道德感が、嘘を排除して真実をみつめる姿勢を西欧に醸成した。このことから自然科学的な考え方が芽生え発展する下地となった。

キリスト教の没落―その道德（これはキリスト教から解きはなすことはできない―）による没落。キリスト教の道德がキリスト教の神に反抗するのである。キリスト教によって、誠実感が高度に発達して、すべてのキリスト教的な世界解釈と、歴史解釈の虚偽や欺瞞にたいして嘔吐をもよおすにいたる。

ニーチェ『権力への意思』ニーチェ全集 十二 原佑訳 ちくま学芸文庫 二十頁  
※誠実感の原語が *wahrhaftigkeit* であることは「ニーチェにおける誠実性の問題」平木孝二郎より

※ *wahrhaft* ヴァールハフト ①本当の、真「実」の②誠実な、正直な

同学社版 新修ドイツ語辞典 十一版 一一三三頁

西欧キリスト教の思想背景から現代的な自然科学が生まれて発展したが、こともあろうにその自然科学がキリスト教の世界観は虚偽であり欺瞞であることを説得力をもって証明してしまったのである。そしてニーチェ（一八四四―一九〇〇）の「神は死んだ」にいたる。それはニーチェだけにとどまらない。

学問が神とは没交渉なものであるということは、こんにち ―たとえそれとはつきり認めただけではないにしても― 腹の底ではだれもそれを疑わない

キリスト教の伝統的な威厳や秩序そして価値を否定され、代わって自然科学が人々の世界観となる。しかし、その自然科学には、世界の意味、人としての目的や目標を示されない。

至高の諸価値がその価値を剥奪されてること。目標が欠けている。「何のために？」の答えが欠けている。

ニーチェ『権力への意思』ニーチェ全集 十二 原佑訳 ちくま学芸文庫 二二頁

天文学や生物学や、また物理学や化学などの認識が、なにか世界の意味といったようなものをわれわれに教えてくれると信じる者があるだろうか。

マックス・ウェーバー「職業としての学問」岩波文庫 四〇頁

自然科学は、私たちの世界の意味や人生の目的といったものに示唆を与えるものではない。ニーチェはキリスト教の信仰が崩壊したあとに訪れる「ニヒリズム」の時代を考えた。

かなしいかな！ やがて人間がもはやそのあこがれの矢を、人間を超えて放つことがなくなり、その弓の弦が鳴るのを忘れる時がくるだろう！

ニーチェ「ツアラトウストラはこう言った」(上) 水中英廣訳 岩波文庫 二三頁

ニーチェによると、その「ニヒリズム」の時代に生きる住人は末人（der letzte Mensch 最後の人間）である。それは憧れを持たず、安楽を第一とする人。自然科学によってキリスト教の権威が失墜しつつあり、欧米をはじめとしたキリスト教圏の人々がキリスト教の信仰から開放され世俗化してくると、ニーチェのいう末人のようになりつつあると考え得る。キリスト教圏ではないが、西欧に勝るとも劣らない科学文明を享受している現代日本人もその範疇ではなからうか。

科学の証拠もわれらがただ而く感ずるばかりである

そして明日に関して何等の希望を与へぬ いま宗教は気休めと宣伝 地獄

宮澤賢治『農民芸術の興隆』前掲

現代日本は、科学以外の真理を認めず、伝統宗教の真理や道徳に価値を認めない。伝統的な秩序や価値を否定し、あるいは破壊し、結句は生存の目的を見失う。目的を見失っているから目標が立てられない。目標がないから科学によって破壊された伝統を再構築し秩序を回復することはできない。崇高な伝統宗教の哲学や信仰から導かれるパラダイムがないので、安楽を得ることを第一としてしまう。このような「ニヒリズム」の時代が日本にも到来することを宮澤賢治は予測していたのではないだろうか。そして、宮澤賢治は『法華経』何よりお題目の信仰を自ら選んで帰依していた。

## ● 仏は死なないか

さて、神が死んで科学の時代になった。そこで、仏教の時代が到来するのか。こういうと、自然科学と仏教は似た

ところがある、むしろ先端科学は仏教に近づいているなどと、短絡的に考える向きがある。しかし、そんな楽観的なものではない。

確かに、科学と仏教のひとつひとつの要素を見ていけば、似ている点は見つかる。しかし実際には、その何百倍も何千倍も、似ていない点があるのだから、個々の類似点をもって、両者の相対的類似性を主張することなどできない。

佐々木 閑『犀の角たち』三頁

筆者自身も「自然科学と仏教」という研究テーマを与えられたとき、一念三千と量子力学あるいは複雑系科学について、それらのミクロとマクロの関係性から類似点を探ろうとしていた。あるいは自然科学の方法と仏教の思惟の方法の比較を研究しようとした。しかし、研究テーマとしては面白いが、意外な類似点を説明できたとしても、教化学に如何なる献上ができるか疑問に感じて現在は中断している。

いや、それでも仏教は進化論を否定するようなキリスト教とは違う。仏教は科学の時代でも大丈夫といわれる仏教者もおられるだろう。しかし、そういえるのだろうか。

釈尊が創成した本来の仏教は、我々が想像する以上に合理的なものであり、神秘の影はきわめて薄い。そして、科学と同じ土俵に上がって四つに組むことができるのは、その本来の仏教だけなのである。

佐々木 閑『犀の角たち』四頁

ここでいう本来の仏教とは、インド仏教学にいうところの原始仏教である。筆者自身の経験で恐縮であるが、仏教の基礎知識がなかったころの筆者が物理学科を卒業して最初に傾倒した仏教は、原始仏教である。その理由は全く前掲の引用の通りである。信を持ち続けながらも筆者が一念三千の世界の一分でも納得できるようになるには原始仏教という経由地が必要だった。そして、それは私だけのことではないと思う。

ともかく、現実に関心を向ければ日蓮宗寺院も「葬式離れ、墓離れ、寺離れ」の「三離れ」の危機を迎えている。それはキリスト教が自然科学に凌駕されていることと何か違いがあるであろうか。仏教にも形而上学がある。それらは科学を信奉する未信徒からナンセンスと捉えられても不思議でない。

科学の時代においては、その形而上学の世界は仏教の素晴らしさを知ったものにはしか信仰できない。宮沢賢治も、あやがらすな暁鳥敏などを招待して講話を受けるほどの父政次郎の影響で、仏教に傾倒する下地があっただろう。少なくとも、不正確な知識であっても、数十年前までの檀信徒は仏教や法華仏教の極基礎を知っていた。だから、いきなりお題目を結論とする法話ができた。しかし、今の檀信徒は未信徒と同じである。法華信仰の未信徒ではない。仏教の未信徒なのである。

## ● 仏教の切り口

幸いにも、原始仏教の主張は自然科学の篤信者にも抵抗なく受け入れられるであろう。それを足がかりにして、より深い一念三千の世界に誘うことも考え得る。「不受余経一偈」に反するかもしれないが、上座部仏教を教えるわけではない。原始仏教を受け入れることができる人には『法華経』の一念三千の世界を受け入れられるのではない

うか。そもそも、今の時代は仏教の極基礎すら知らない人が充満する末法の時代である。四諦に始まる仏教の基礎と『スッタニパータ』や『ダンマパダ』に説かれるような仏教の根本的背景を元に一念三千の世界の素晴らしい世界に誘引することを提案したい。方便は嘘という意味ではない。巧みな手段 (upaya) である。むしろ、それがないと一念三千の教義の一部分すらも理解できないのではないか。一部分すら理解できないのであれば以信代慧の信仰の世界にも入れないのではないか。

西欧キリスト教文明は、自ら生んだ自然科学によって、その支柱にあるキリスト教がゆらいでしまった。そして、キリスト教に取って代わった自然科学は、生きる意味や目的を与えない。真の苦滅や安穩について説示しない。そんな、西欧文明の影響下にある国々は、科学と親和性のある心の支柱を求めている。そこに仏教が果たせる役目があるのではないか。

鬱病、自死の増加、無縁社会、虐待、ストーカー、モラルハザードといった問題は、宗教の意味を認めない時代と無関係ではあるまい。それらの解決は宗教の古典にあるのではないか。キリスト教の古典はもう出尽くしている。自然科学の信徒をも唸らせ違和感を持たせない、仏教を拠り所とした処方箋の発信こそ第一歩ではないか。それが、科学にとつぷり浸かった未信徒、あるいは未信徒と差がない戦後世代の檀信徒に対する教化の切り口あるいは方向性となるのではないか。

参考文献

中公文庫『近代科学の源流』伊東 俊太郎

北樹出版『反科学を越えて』荻澤 数雄

大蔵出版『犀の角たち』佐々木 閑

岩波文庫『ツァラトゥストラはこう言った』ニーチェ 氷上 英廣訳

ちくま学芸文庫『権力への意思』ニーチェ全集 十二 原 佑訳

ちくま文庫『宮澤賢治全集』

NHK出版 100分de名著『ツァラトゥストラ』西 研

平凡社『世界大百科事典』第二版